名古屋学院大学論集　言語・文化篇　第31巻　第2号　pp. 97–107

〔学術資料〕

越境作家イブラヒム・アミールの朗読テクストについて

土　屋　勝　彦

名古屋学院大学国際文化学部

要　　旨

2019年11月29日に越境作家イブラヒム・アミール氏の講演・朗読会を行い議論した。講演テクスト「赤鼻が到着しました」は，シリアからオーストリアに亡命・定住した自己経験を諧謔と皮肉を交えながら語ったものである。民族・宗教・文化の異なる者が新たな居留地の人々と衝突しながら理解しあう日常経験をもとに，ユーモラスに語りかけるアミール氏にとって，アイデンティティの在り方は常に揺れ動き，偏見や紋切り型の表象に対して向き合っていく姿勢や，難民・亡命問題をはじめとするシリアスな諸問題を自己戯画化し戯曲にすることの意義など，雄弁に語られ活発に意見交換がなされた。

キーワード：クルド人，シリア，難民，越境文学，演劇，アイデンティティ

Zum Lesungstext von Ibrahim Amir

Masahiko TSUCHIYA

Fakultät für Interkulturelle Studien
Nagoya Gakuin Universität

発行日　2020年3月31日

大阪のゲーテ・インスティテュートの招きで来日したイブラヒム・アミール氏を招待し，2019年11月29日に名古屋学院大学希館204号教室で朗読・講演会を行った。本稿ではその際のテクストと討論をめぐって報告したい。

まずアミール氏のプロフィールを紹介する。1982年シリアのアレッポにてクルド人家庭に生まれた。アレッポ大学で演劇とメディア論を学んでいたが，クルド人学生組織の活動により政府から退学処分を受け，2002年にウィーンへ亡命する。ウィーン大学で医学を学び2012年に卒業し医師となるかたわら，演劇作品を雑誌などに公表する。2009年短編「あの晩彼女は深く眠った」により亡命文学賞を受賞，2013年最初の戯曲「栄誉を持て」上演によりオーストリアのネストロイ演劇賞を受賞し，さらに各地で上演された。2015年にはケルンで劇作「死ぬ前に死ね」が上演され，最新作「ホモ•ハラール」がウィーンで上演され激しい議論を引き起こした。ハラールとはイスラム法で許される項目，とくに食材や料理を指す。この作品は，2037年，難民受け入れフィーバーから20年後のドイツを舞台とする。当時難民として庇護権を求める活動を行い，その支援をしていたヘルパーたちが，久しぶりにある葬式で再会するところから始まる。当時，正義と権利を求めて共に戦い，愛しあい結婚した人たちが，その後異文化の壁にぶつかってお互いに失望と不満をぶつけ始めるという物語である。アミールによると，この作品は難民をめぐる複雑な社会問題に対して一定の回答を与えるというよりも，むしろ問題を投げかけることを意図している。つまり矛盾に満ちた人間そのものを描こうとした作品だという。しかもこうしたシビアな主題を喜劇あるいは風刺劇として提示する点が特徴的である。

なお，今回11月23，24日に大阪のフラッグスタジオにて，「VISIONEN」ドイツ同時代演劇リーディング・シリーズ Vol. 9として，イブラヒム・アミール作『ホモハラル』（翻訳：長田紫乃，演出：髙安美帆）が上演された。高安は，「ホモハラル」のあらすじを次のようにまとめている。「舞台は 2037 年のドイツ。難民受け入れフィーバー＆パニックから 20 年という年月が流れ，流入した移民の数も危惧されていたほどには増加せず，今やいたって穏やかで世界一寛容性の高い国になっているドイツ。当時，難民として庇護権を求めていたり，その支援をしていたヘルパーたちが，久しぶりにあるお葬式で再会します。当時は，正義と権利を求めてともに戦い，中には恋に落ちたり，結婚した人たちが，その後異文化の壁にぶつかって離婚を考え始めたり，期待と現実のズレから現 在の生活に失望し，その不満をお互いにぶつけ始め…。」

さて，今回のアミール氏の朗読・講演会テクストのタイトル「赤鼻が到着しました」には，自分を道化師に見立てるアイロニーと酒飲みのシンボルや風邪の兆候をも意味する多義性がみられる。まず冒頭のせりふは，書き手と読み手の関係性について語っているが，自分の話を語り自己をさらけ出すことが，受け手の側における自己表出をも促すという弁証法的な関係性を提示する。人と人とが知り合う条件はこのような相互浸透にあるという。次のシーンは2002年オーストリア大使館の前でヴィザの発行を待つ人々を描く。イランのオーストリア出国希望者が家族総動員して立派な市民を装う様子，出国を許可された自分も友人もオーストリアをほとんど知らなかったこと，オーストリアが自国語（オーストリア語）を持たずドイツ語を話す国であること，シリアもアラビア語でありシリア語ではないこと，オーストリア人もモロッコと間違えるほどシリア

を知らないことなど，国名と「国語」の不一致をユーモラスに語っている。次節では，「論理的にできあがっているこの言語」をまたたくまに習得し医者になった経緯を説明したあと，オーストリアで「善良で感じがよくてオープンな外国人」としてプレゼンすることの必要性を語り，逆にオーストリア人の閉鎖性を皮肉り，自分が感情的に議論することの是非を問いつつ「政治問題について意見を交わし議論を始めるが，最後はきまって，おたがいの母親についての話で終わる」（アラブの思想家の言葉）という。次に語られるのは，家庭医になって仕事を始めたものの，風貌が「通常のオーストリア人」とは異なっていたために，介護士か看護師に思われたり，赤い救護バッグを持っていたためにピザの配達人に間違われたり，はては押し込み強盗に見なされたりした経験の滑稽さである。ドイツ語で夢を見るようになりオーストリアを「ふるさと」と思う気持ちになるが，オーストリア人の友人はおらず，外国人憎悪を売りにする選挙ポスターに愕然とする。最後にハンガリー生まれの90歳の長老ウィーンっ子を往診し，その老人と対話するうちに，ある土地に定住することの意味を考える。第二次大戦中にハンガリーに逃れウィーンに戻ったこの老人の経験が自己体験とダブりながら伝わってくる。「到着したという気持ち」を持てない自分に，そんな気持ちを「引っぺがした」と語る老人の言葉に考え込みながら，突然の急患に急ぐ。その時警官に呼び止められ，ひどい対応を受けるが，侮辱罪で告訴することもなく，「到着したという気持ちを自分で引っぺ返す」意味を問い直す。

アミール氏はその後の討論でも，ある国に定住することの意味について考えており，常に外貌の違いから生ずる日常的差別や誤解などを受け続けると，どうしてもアイデンティティの揺れを感じざるを得ないという。また難民や少数民族排斥・差別といった深刻な主題を扱う戯曲でも，それを悲劇ではなく悲喜劇として描くのは，悲惨な事柄も他者にとっては滑稽に感じることがあるという事実に起因し，またウィーンには「笑い飛ばす」民衆喜劇の伝統もあるからだという。出身国シリアでの検閲をかいくぐって叙述される微妙な言説の在り方も，こうした間接的かつ諧謔的表現を発現させる一因となっている。偏見や紋切り型はどの社会にもあるが，それを認めたうえで，一元的なものの見方を相対化し，茶化し，複眼化する過程の中で，民族や言語，宗教，文化を横断していくダイナミックな劇空間を作りたいという。安定した言説を「引っぺ返す」ことの意味はそこにあるだろう。本テクストをもとにまもなく戯曲•上演する予定もあると伺った。クルド語とアラビア語，ドイツ語の3言語を母語や獲得言語として駆使するアミール氏の「移動するアイデンティティ」に注目しつつ，今後のさらなるご活躍を祈りたい。最後に掲載を許可してくださった講演者のイブラヒム・アミールさんと翻訳者の鈴木仁子さんにこの場を借りて感謝申し上げる。

赤鼻が到着しました

イブラヒム・アミール
鈴木仁子訳

お読みのみなさまがた，申し上げておかなければなりません。みなさまに向けて自分の言葉をまとめてみよう，白い紙に黒い文字で文章のかたちにしてみようと考えはじめてから，わかったことがあるのです。つまりです，みなさまにとっても私にとっても，これはあまり気軽に楽しめるものにはならないなということなんですね。なぜならみなさま，みなさまと私は個人的な知り合いってわけではありませんから。みなさまにとって私は白い紙の上の黒い文字だ。そして私にとってみなさまは，この紙面のこのインクの連なりについて評価をくだす人であるわけです。ところがここで主導権を握っているのは私，みなさまに向かって白黒くっきり，自分の紹介をするのは私です。読者ってものは気楽だ，書く方はそうじゃない。しかしながら，みなさまのためにこいつは自分を曝け出すんだなとか，こういう近づき方はもっぱら読者たる自分のためにあるんだとか，もしもみなさまがお考えのようでしたら，はっきり言いますがとんだ勘違いです。このエンターテインメントはいろんな方向性がありましてね，みなさまは私を曝け出させるだろうけれど，私もみなさまを曝け出すんです，そしてみなさまがご自身を，私たちみんなを，たがいがたがいを曝け出す。そうやってこそたがいが近づきになれるのです。詳しくご説明しましょう。私が自分の話をする，そうしますと，昔こう言いましたでしょう（といってもどこでそう言ったのか憶えていないんですが)，「よそ者の話のなかにおのが自身を探せ。もしそこに自分自身が見つかるなら（きっと見つかるだろう)，人と近づきになるプロセスはもう始まっている，いや，もうそれで完了しているのだ」と。他人と自分を知るための，なかなか感じいい考え方ですよね，そう思いませんか？　なに，「意味ないことをくだくだいうな」？　まあそうでしょうが，きっちり17行のなかにどれだけの〈白黒はっきりした〉意味を期待できるとお思いでしょうか？　ぜんぜんですよ。

ネムサ

2002年，ダマスクスのことです，寒い冬でした。私をはじめカッカした人たちが何十人も，オーストリア大使館の前で待っていました。大使館でヴィザの発行を担当する気の短い女性職員がいいかげん窓を開けて，どの赤鼻が〈ネムサ〉行きの出国を認められたのか，発表してくれるのを待っていたわけです。〈ネムサ〉というのはアラビア語で〈オーストリア〉のことです。見ていたら面白かったですよ，オーストリア行きを希望している連中は，いまや全員，突如としてビジネスマンとかお金持ちとか大卒とか寡頭政治家とかになっていたんです――というか，私を含めて，少なくともそう見えるようにしていました。男だったらぱりっとしたスーツ姿，洗練された格好でアタッシュケースを下げる。〈うるわしい〉シリアでそんないい暮らしをしているのに，

どうしてよその国に移民しなくちゃいけないのかしら，と疑問に思われますよね。それは，オーストリア大使館がわれわれに対して厳しいからです。ネムサに行きたい人は，自分がすごいお金持ちで，会社のオーナーで，大学の卒業証書もありますってことを，大使館に証明しなくちゃならない。なぜか。ネムサの国は，ただ飯食らいの貧乏人には来てほしくないからです。だからみんな思いつきでなんにでもなる。私の知り合いなんか家族総動員させてました。もしも大使館から家に電話がかかってきた場合には，お母さんは彼の秘書ってことにする。弟がマネージャーになって，お父さんが弁護士になって等々。ネムサ行きのためなら，なんだってやったわけです。さてその日，幸運を射止めたのは私でした。私はそれで一秒たりともためらわずに，スーツケースの荷造りをしに家まで駆けていきました。途中で同級生に出くわしたんですが，その同級生が私に，「そんなに急いでどこ行くんだ？」と訊きました。「ネムサ！」と私は答えました。――ふたりの会話はアラビア語だったんですが，そのまま訳しますね――「ネムサ？　それってお前の知り合い？」「違う！　ヨーロッパにある国だよ」と私が答えますと，彼，「聞いたことないな」。「お前，本読まないからな」と私が言うと，「なんて本に書いてあるんだ？」と彼が言います。正直，ここで私はとっさに適当なことを言いました。じつは私もネムサについての本など一冊も読んだことがなかったんです。「『ネムサと第二次世界大戦』さ！」と私は答えました。ネムサはヨーロッパの一部なんだから，きっと第二次大戦に関係してるはずだ，と思ったわけです。「へーえ。ま，元気でやれよな！　ところでそのネムサでは何語をしゃべるんだ？　ネムサ語かい？」「アラマニッシュだよ」と私は答えました（〈ドイツ語〉のことをアラビア語でこういうのです）。「なんだよ，はやく言えよ！　お前アラマニアに行くんじゃんか！（つまり〈ドイツ〉ってことです）」と彼。「違うって，このバカ！　ネムサはアラマニアじゃないの！　アラマニアの言葉を話してるってだけなの，わかったか！」と私は言って，友達と別れて道を急いだのでした。

というわけで，みなさま，これが私が〈オーストリア〉という単語にはじめてまともに向きあった体験だったわけです。未知の国，しかもその国にはその国独自の言語がない。みなさま，もしみなさまがここで，こいつはいま〈オーストリア〉を軽蔑しようとしてるんだな，とお思いになったとしたら，それはみなさまが私の話のなかに自分を見つけたということです，でもそれは早すぎです，性急すぎます。軽蔑だなんてとんでもない！　知らない国で，独自の言語を持たない国は何百とあります。たとえば私の出身国，シリアというちっぽけな国ですが，言語はアラビア語であって，シリア語じゃない！　シリアはいろんな異なった民族が集まっている国で，それが国を豊かにしている。オーストリアとまったく同じです！　ネムサの人々がシリアという国をぜんぜん知らないということは，すぐさまわかりました。それもウィーンの三五課（滞在許可局）でネムサの滞在許可証を受け取りに行った日にです。女性の係官が私にこう言いました。「あのう，モロッコって，どんなところかしら？」「モロッコ？」私はきょとんとしました。「ええ。恋人とモロッコにバカンスに行こうと思ってるんですよ」とその係官。「僕，シリアから来たんですけど！」と私が言いますと，「知ってるけど，シリアってモロッコのそばですよね。似たようなもんじゃないの？」まあね，二つの国は別々の大陸にあって，サハラ砂漠という世界最大の砂漠が

両国を隔てているっていう，ちょっとした違いはあるんだけど――まあ，似たようなもんか，と私は思い，「ええ，あそこはすばらしいですよ！　ラクダとかいっぱいいるし，水パイプが吸えるいい飲み屋とかありますしね」と答えたのでした。

はいはい，了解，自分のことをもっと話せって言うんでしょう。「意味ないことをくだくだいうな」とみなさまが思っていらっしゃるのを，いま感じました。

「おまえ（ドゥ），そそるぜ（ガイレ・ザウ）」

何年かネムサの大学で勉強をして，私は医者になりました。この歳月は，ボタンを押したらなんでもすいすい進んでいくようなものではなかった，とだけは申しておかなければなりません。アラマニッシュ（つまりドイツ語）を話せない人間にとっては，まことに厳しい歳月でした。最初の1年はアラマニッシュをゼロから学びました。シリアではドイツ語に触れる機会がなかったのです。ドイツ語のことをドイツ語では〈ドイチュ〉ということすら知りませんでした。ずっと〈ジャーマニー〉とか〈アラマニッシュ〉とか言うんだろうと思っていたのです。シリアでドイツ語に触れる唯一の機会は，ドイツ製のポルノ映画でした。ドイツは最大のポルノ映画製作国なんですね。だから私のはじめてドイツ語は〈ドゥ，ガイレ・ザウ（おまえ，そそるぜ）〉。あれはドイツ語だったんだ，と何年もしてから気がついた次第です。

私はあっというまにドイツ語という，冠詞に至るまで論理的にできあがっているこの言語が大好きになりました。読むのも書くのもそこそこ簡単です。私は20才でネムサに来ましたので，知的に成長する年頃をネムサで迎えました。ドイツ語の本をたくさん読みました。児童文学の『コフキコガネ，飛べ』からはじめて，ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテのような文豪の小説まで。ゲーテはいまもって難しいですけど。

私はSNSでネットワークを築くことができる程度には言葉をマスターしました。人と知り合いになろうと努力しました。壁を破ろうとして，世界や宗教について，心理学やセックスや哲学や政治について，人々と語り合いました。知的なテーマについて語れば，人々は私を受け入れてくれるのではないかと思ったのです。事実，こいつは語学の才能がある，ほかの人たちと違って（！）と思われたようでした。「ドイツ語すごくうまいね。いつからここにいるの？　2年前？　うそぉ！　ほかの人とぜんぜん違うね！」というような言葉を何度となく耳にしました。はじめのうちは嬉しかったのですが，そのうちだんだん，「きみはほかの人とは違う」という言葉を聞かされるのがいやになってきました。人と知り合いになる愉しさは，ほどなく消えていきました。というのも，人と知り合いになるにはまず自分から努力して，自分がいかにオープンかを示さないとだめなんだ，とわかるようになったからです。そうしないかぎり相手からはなにも返ってこない。私に対する関心もゼロ。言葉を換えるなら，私は善良で感じがよくてオープンな外国人として，いやでも自分をプレゼンしなければならない，ということ。オープン（オッフェン）な外国人？　世界に心を開いている（ヴェルト・オッフェン）外国人？　この言葉の意味をより深く理解したのは，このことについて別

の角度から考えてみたときでした。じゃあ，外国人じゃなくて〈内国人〉のほうは，どのぐらいオープンなんだろう，どのぐらい世界に心を開いているんだろう？　そんな問いはなしなんだろうか？　まことに失礼ではありますがみなさま，世界に心を開いているオープンなオーストリア人のうち――いや，ウィーン人にしましょうか――どのぐらいの人が，ウィーンからいちばん近い隣国の首都ブラチスラヴァ（スロヴェニアの首都。ウィーンから約55キロ）に行ったことがあるんでしょうね？　あるいは，世界に心を開いている内国人のうちどれだけが，オーストリアで二番目に話されている言語――セルボクロアチア語です――を話せるでしょうか？　本当のところを知ったら，私と同じようにみなさまも仰天なさるでしょう。統計があるのか，と言われるかもしれませんね。ないです。でも〈内国人〉がどのぐらい世界と文化に対してオープンなのか，いちど調べてみると面白いかなと思いますよ。

またあちこちで耳にしたのが，私もお気に入りのこういう言葉でした――「そうかもしれないけど，どこも同じようなもんじゃないの」。これにはいつもこう答えました。「でもホノルルの住民がどのぐらい世界に対してオープンなのかを知っても，得るものはないでしょう。もっともほとんど間違いなく，ホノルルの人のほうがカイザーミューレン（ウィーンの一地域）の人より〈よそ者〉に対してオープンでしょうけどね」。このテーマだとどうしても自分が感情的になる傾向があったことは認めます。でも私は感情的になって議論するのも好きなんです。このことを考えると，アラブのある思想家が講演で言っていたことを思い出して，ついニヤついてしまいます――「われわれは会うとさまざまな政治問題について意見を交わし議論をはじめるが，最後にはきまって，おたがいの母親についての話で終わる」。

誓って言いますが私は医者です

私はすぐさまネムサのいろいろな決まりを学んだのですが，いまだにネムサに〈到着〉していませんでした。体は到着していましたよ，しかし心がまだだったんです！　3年たつと私はアラマニッシュで夢を見るようになって，これでいよいよ自分もここに〈根づき〉はじめたのかなと思いました。ところがじきに思い知ったのですが，〈ネムサ〉という土壌は，私の根っこをまだまだ受け入れようとしてくれなかったんです。そもそもネムサに留まる許可を得るためには，毎年毎年書類を山ほど出さなければなりませんでした。そうか，じゃあ根っこを張るにはまだ早すぎたんだ。私はまず着地しなければならないのでした。たまたまそよ風か蜜蜂かに運ばれた野生の果実の種のように。もちろん，なにかの動物の腸内に入っていなければの話です。果実を食べた動物にウンコといっしょにどこかへひり出されてしまうかもしれませんから。

どんな心境になるかは，自分がいま置かれている状況次第でした。自分がネムサの美女の手を取って愛を交わしているとしたら，そよ風に運ばれた種のごとき心地でしょう。ウィーンのドレスナー通りにある三五課で滞在許可の延長を願い出るときは，いまにもウンコといっしょに私をひり出しそうな動物の腸内にいる心地。さて，私はなんとか着地しまして，こんどこそ到着しよう，ここでいい人生を送ろうと奮闘したのでした。私は職業訓練を受け，家庭医（ホームドクター）になりました。最初

はウィーンの八区，ヨーゼフシュタットにある医院に勤めました。ネムサでもシリアでも確かなことが一つあります。それは，医者であればある程度尊敬されるということです。人に敬意を払われて，いつでも歓迎してもらえる。ただし，外見がネムサの一般的な医者のようでなかった場合，社会で認めてもらうのは最初はたいてい困難です。ざっくばらんに言いましょう！　濃いひげを生やして，黒くて長い髪をした南方系の男が白衣を着ていて，言葉になまりがあったら？　すぐに医者だと思いますかね？　介護士か，せいぜい看護師だろうとは思われても，まさか医者とは？「あなたが医者？　いつからです？」と，カビが原因で脚に潰瘍ができた患者を診ていたら言われたことがあります。職業訓練の一環として，動けない年配の患者を定期的に訪問したこともありました。ごくふつうの赤い救急バッグを下げて，ヨーゼフシュタットを歩いて往診するのです。忘れもしませんが，あるとき赤いバッグのせいで，ピザの配達人だと思われたことがありました。ドアの前で開けてもらうのを待っていると，隣室の年配の男性に声をかけられたものです。「パウリのやつ，またマルゲリータを注文したのかね？」。私は答えました。「いや，あいにくマルゲリータではありません。私はただの医者でして」。するとその人は真顔になって,「いや申し訳なかった，ドクター，悪気はなかったんです」。私はにっこりして答えました,「どうしてあやまるんです？　私がパウリなら，マルゲリータが来るほうがよっぽど嬉しいですよ」。またある時には年配の女性患者を往診したのですが，どうしても玄関のドアを開けてもらえなかった。私が医者ではなく，どこかのごろつきだと思っていらしたんですね。「とっとと消えてちょうだい，でないと警察を呼ぶわよ！」とドアの後ろでがなり声がしました。「奥さま，私は医者です」「あたしはぜったいなにも買わないからね！」「誓って言いますが私は医者です，うちの医院に電話して確かめてください，身元を証明してくれるはずです」。私は必死になって説得しようとしました。女性はなんどか電話をしてから,最後にやっと開けてくれました。「わかったわ。でもこないだ来た人は金髪だったじゃない」と，ドアの向こうで彼女が医院の者に電話で話している声が聞こえてきました。「まあ,なんてことでしょう,ドクター,ほんとにすみませんでした,この地区は最近押し込み強盗が何件もあったんですよ。あたしときたらよぼよぼの婆さんで，ボケる一歩手前なのよ，ほんとに勘弁してちょうだいね」と女性は謝りました。のちには訪れるたびに毎回食事とお菓子を出してくれて，往診に感謝してくれるようになりました。

ときおりふるさと――なにかしらのふるさと――が懐かしくなると，自問します。「僕はいつになったら到着するんだろう？　もうネムサに八年以上いる。そのうちこれだ，という時が来るのだろうか？　僕はとっくにドイツ語で夢を見ているし,ドイツ語で書き物もするようになった。じゃあいつになったらその時が来るんだろう？　僕は旅行に出るときまってウィーンが恋しくなる。ウイーンの表も裏も知り尽くしている。ウィーンのどの街角にも僕の物語が,場面が,恋が,悲しみが，涙が，喜びが，孤独が，連帯がある」そうです，こんな感情を持つのがふるさとに対してでないとしたら，ほかにどこがあるでしょう？　ところがです，私の友人には内国人がほとんどいなかったのです。もちろんわざとではありません。選挙があると,ある政党の選挙ポスターのそばを通りかかるたびに胃の腑がひっくり返って,反吐が出そうになりました。ネムサではけっこう人気のある党で，外国人憎悪を選挙でいちばんの売りにしている党なのです。

赤鼻が到着しました

ある日仕事をしていたら，SNSの通話でウィーンの女性介護士が私に連絡してきました。一人暮らしでアパートから出られない90才の男性を往診できないかというのです。私は承諾して，予約を入れてもらいました。「ただドクター，その方はご高齢でして，気分にかなり波があるんです。個人を攻撃しているとは思わないでくださいね」と親切な介護士は言いました。

翌日，予約した時間に往診しました。呼び鈴を鳴らすと，はたして背中の曲がったたいそう高齢の男性が姿を現しました。「こんにちは，私はあなたを診察する医者です」と言うと，男性は私を招き入れました。私は仕事にかかりました。心電図を取りたいので上半身裸になってくださいと頼むと，とても礼儀正しく指示に従ってくれました。質素なアパートのいくつかの壁に，古い白黒写真がたくさん掛かっています。盛装した人が6人写っている写真が目に留まって，私はじっくり眺めてしまいました。大人が3人，子どもが3人，街頭でポーズを取っています。「僕はこの場所を知ってるぞ」と私は思いました。「1929年，ウィーン九区アルザーグルントだ」と男性は言って，こう続けました。「ここにいる，半ズボンをはいているのがわしだ。9才だった」「じゃあ，あなたは大老(たいろう)級のウィーン子なんですね」と私はほほえみながら言いました。「わしはウィーンそのものだ，ウィーンのことは裏も表も知り尽くしておる」と彼は答えました。「僕も自分でそう言っているんですよ」と私は言いました。正直この時点で，出身はどこだねと訊かれるだろうと思っていました。いつもそうでしたから。ところが男性にはそんな質問はどうでもいいようでした。「わしはここに永遠の昔から住んでおる。みんなの頭がどうかしだした時を除けば，人生のほとんどをこのウィーンで過ごした」と彼は言いました。「みんなの頭がどうかしだした時？」と私は胸の内でくり返しました。「あのおぞましい時代が終わってウィーンに戻ってきたとき，わしは誓った。頭の狂った連中にウィーンを渡すわけにはいかん，とね。だからここでやり直したんだ」。「おっしゃるとおりです，ウィーンには魔力のようなものがある。容易には去りがたい都市(まち)ですよね」と私は言いました。「いやいや，ドクター，魔力なんかじゃないよ。ただウィーンと言うしかないな。初恋みたいなものだ，けっして忘れることができない」。私は必要な診察を行い，男性の心臓がまだしっかりと血管で脈打っていることに驚いて，彼の住居を辞しました。血液検査の結果が出たらまたすぐに伺いますと約束して。診療所に帰る道をたどりながら，心はあの老人にすっかり魅了されていました。「みんなの頭がどうかしていた時」というのは，第二次大戦の時代のことを言ったんだろうか？　それから数日して血液検査の結果が出たので，私は90才の大老ウィーンっ子に電話して，往診の日を決めました。玄関の呼び鈴を押しました。老人はドアを開けると，人を射抜くような，まだ生気にあふれた目でじっと私を見ました。「こんにちは，往診でまいりました」と言うと，中に招き入れられました。「さてどうです？　わしはまだ生きられるかね？」と笑みを浮かべて老人は言いました。「生きられるなんてもんじゃないです！　健康そのものですよ，すぐにでもどなたか女性と結婚して，お子さんを作ることをお勧めします」と私が答えると，彼はからからと笑いました。私は血液検査の結果を報告し，それから「ちょっとお伺いしてよろしいですか」とためらいつつ訊ねました。「いいとも」と彼。「先

日私がまいりましたときに，みんなの頭がどうかしだした時にウィーンを去った，とおっしゃいましたね？　なにかひどいことをされたのなら，どうして戻ってきたのです？」「わしは生まれがハンガリーでね。それで，わしらはハンガリーに逃れた。そしてすべてが終わったときにまた戻ってきた」。「迫害される不安はなかったのですか？」と私。「なぜ迫害されなくちゃならんのかね？」と彼。「なぜって，ご存じでしょう，たくさんのユダヤ人が迫害されて，大量殺戮されましたから」。「そうか，あんたはわしがユダヤ人だと思っているのか。あいにくわしはユダヤ人ではない。ユダヤ人の友達はたくさんいたがね。悲しいことにみんな失ってしまったが。亡命したか，あんたも知ってのとおり，皆殺しにされてしまった」と彼は答えました。「それでもあなたは戻ってこられた。どうしてです？」と私は好奇心を抑えられずに訊ねました。「わしがなぜ戻ってきたか，その物語を訊きたいというわけか。あいにくそんなのはないよ。わしはここで青春時代を過ごした。苦しくて辛いこともたくさんあったが，すばらしい時代だった。たんにこの都市に惚れこんでいるから戻ってきた，というのでは物足りんかね？」と彼は言いました。「でも，都市（まち）というのは家や庭だけからできているわけではないでしょう。あなたに苦しさや辛さを与えた人間たちはどうだったんです？　その人たちもこの都市の一部ではないのですか？」老人はじっと考え込み，しばらくしてこう言いました。「ちょっと訊きたいんだが，あんたはどこの出身だね？」ああ，昔ながらのこの質問か，と私は思い，「シリアです」と答えました。「いいや，ドクター，あんたはウィーンの出身だろう」と彼は言って，こう続けました。「あんたは，自分はウィーンの表も裏も知り尽くしていると言った。あんたはここで大学を出たんだろう。歳はせいぜい30だな。だとしたら20才でここに来たんだろう？　それなのにいまだにあんたは，問われたときに自分はウィーンの出身だとは言わないわけだ」。「90才のお方にしては計算がすばやい」と私は目で笑って続けました。「おっしゃるとおりです，私は20才でここに来ました。それなのに，いまだに到着したという気持ちになれないのです。本当のところを言うと，内国人の友達もいませんし，国の統合（インテグレーション）政策が自分を歓迎しているとも思えないんです」。「本当のところはだな，そんな気持ちをあんたにくれる人など誰もおらんよ。年寄りの言うことを信じなさい。わしにだって，誰ひとりそんな気持ちをくれなかった。大多数が気が狂ってしまったあの時代の前も，後もな。到着したという気持ちは，わしは自分から引っぺがしてしまったよ。わかるかね，わしはウィーンっ子だ，そしてこれからもずっとウィーンっ子だ，それが本当のところだよ」。私は話ができたことに感謝して，患者に別れを告げました。到着したという気持ちを自分から引っぺがせ？　と診療所に戻る道すがら考えました。私はすっかり想いに沈み，老人の言葉を反芻していました。現実に引き戻されたのは，携帯の大きな音がしたときです。電話を取ると医院の助手でした。すぐ医院に来てください，急患ですというのです。私は赤い救急バッグを背中に回して，ヨーゼフシュタットの街路をばたばたと走りました。「待て，止まれ！」と声がしました。振り返ると警官が2人，手で私を指しています。「動くな！」若い方が言って，こう質問しました。「おい，おまえ（ドゥ），そんなに急いでどこ行くんだ？」「おっしゃりたいのは，あなた（ジー）たはそんなに急いでどこに行くんです，ということですか？」と私は警官の言葉を訂正しました。「身分証明書を出せ」ともうひとりが言いました。「なぜ私をおまえ呼ばわりするんです？　どこかで親しい知

り合いにでもなりましたっけ？」と私は言い返しました。「はやくせんか！　俺たちは時間がないんだ！」ドスのきいた声で警官が言いました。私はガチガチになりながら，「いま時間がないのは私のほうです。ですから，もっと丁寧な口をきいてください，さもなくばあなたなんか糞食らえ！ですよ」と言いました。「てめえわかってんのか，公務員侮辱罪だぞ。たんまり食らうだろうぜ」と若いほうが言いました。「私の身分証明書です」と医師の証明書を見せると，警官は目を丸くして証明書を見つめました。「それじゃあ，あなたはお医者さんで？」警官が言いました。「こんどは敬称を使われるんですね？　証明書を見たからですか？」と私は迫りました。「申し訳ない」。「なにが申し訳ないのです，医師を侮辱したことですか？ それとも外国人を侮辱したことですか？」，私は挑むように言いました。「もう行っていただいて結構です」と年上の警官が言いました。「いや，行きません！　あなたがたのお名前とID番号を頂戴したい。そう簡単にすませられる問題ではありません」2人の警官は名前と番号を教えました。私は先を急ぎながら，途中で彼らの名前を書いたメモ紙をゴミ箱に捨てました。もちろん訴える気などなかったのです。そんなことは毛頭思っていませんでした。じゃあ，あの老人が言ったのは，ほかならぬこのことだったのだろうか？ 「到着したという気持ちを自分で引っぺがせ」，つまり自分を貫け，と!? そう言いたかったんだろうか？　もう何年も家から出たこともないような人間の言うことを信じるべきだろうか。でも，あの老人の時代は私の時代よりももっと厳しい時代ではなかっただろうか。それでも彼はウィーンに背を向けなかったのでは？

みなさま，私にはわかりません。到着したというのは，「あなたを心から歓迎します」という文とどこかで繋がっていると私は思うのですが，それともあなたのご意見は違いますか？